
【ラノベホラー】彼のポスター

たいらひろし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【ラノベホラー】彼のポスター

【Nコード】

N2429Z

【作者名】

たいらひろし

【あらすじ】

ライトノベルホラー。某新人賞の二次選考まで勝ち上がったお話です。pixivに掲載している小説を転載しております。

ホラー形式をとっていますが、流血や暴力、グロテスクな表現などは含まれていません。高校の掲示板に張り出されたポスターに『すき』という意味不明の落書きがされた。ポスター製作者の英介は犯人を捕まえようと躍起になるがなぜか見つからず、徐々に犯人の行動がエスカレートしていき……。

ブローグ

「コンコン。たっだいまい英介。部屋入るよー。元気してたー？」
「おう、お帰り姉貴。旅行、どうだった？」

「なかなか楽しかったよー。はいこれ、英介におみやげ。昔の、百年くらい前に製造された水彩絵の具だって。こういうの、好きだったでしょ」

「昔の絵の具？ レアものじゃん。高かったんじゃないの？」

「そうでもなかった。たまたま立ち寄った国立公園で骨董市みたいなのが開かれててね、そこで投売りされてたの。貯蔵倉の整理のため、二束三文で売ってますー、とかいつて。どう？ 気にいってくれた？」

「……うん、うれしい。すげえうれしい。サンキュー姉貴。……ふーん。昔の水彩絵の具ねえ」

「あのさ。よかったら、絵のモデルになってくれねえか？」

早秋の放課後。柿色に染まる静寂の美術室へたまたま忘れ物を取りに顔を出した美弥へ、ひとり居残りしていた美術部の英介が決死の申し出をした。たったこれだけ告げるのに三日もかかってしまった。以前からお願いしようと思っていたのだが、なかなかタイミングがつかめなかったのだ。機会はいくらでもあったというのに。

驚き顔をする美弥に英介が説明する。

「ほら俺、今度さ、掃除強化習慣のポスターを書くことになってるだろ。モチーフをうちの高校の女子にしようと思ってるから、モデルがいたほうが描きやすいんだ。悪いけど、協力してもらえねえかな」

「ああ、なるほどね。かまわないよ」

ふたつ返事で快諾した美弥は、近くの椅子に腰をおろした。

「ああ、ちょい待ち。ポーズがあるんだ。少し足を開きつつ背筋を伸ばして立つ。視線はまっすぐ。それから、左手を腰に。右手は前方、水平に突き出して、人差し指をびしっと上にたてる」

アメリカンプロレスラーが「アイアムナンバーワン！」と叫ぶときの格好に似ていた。

苦笑しつつ美弥がきく。

「……なにこの姿勢。どんな意味があるの？」

「掃除をサボるなって叱ってるポーズ。んじゃ、さっそく始めるか」
使い古したパレットと水入れ、そして古風なチューブに詰まった水彩絵の具をセットした英介がイーゼルに向かい、美弥が指示されたとおりのポーズをとり、ふたりだけの時間が訪れた。

絵筆を握った瞬間、英介の心からあらゆる雑念が消えうせた。英介の瞳がここではない遠くを見つめ、絵筆の先が画用紙上を踊る。剣道部で鍛えられた足腰の賜物か、美弥は一度も休憩をはさまずに立っていた。

二時間は一瞬だった。窓の外はとうに紫色と闇色ばかりだ。

白い蛍光灯のした、英介が筆を置いたことで立ちっぱなし終了を悟ったのか、軽く伸びをした美弥がさっそくイーゼルを覗きこみ、
「あれ？全然、あたしに似てないじゃない。なんでよ？」

嫌味でも不平不満でもない、澄んだ疑問をのせた声で、英介に笑いかけた。

たしかに、彼女のいうとおりだった。

美弥は胸まで届く黒髪、輪郭が細く、引き締まった口元や眼鏡ごしの切れ長の瞳が知的な印象を与える、一言で表現するならばキツネに似た面立ちだ。

対し、ポスターに描かれた少女は肩までしかない茶髪、ふっくらした輪郭に脱力気味の口元。たれ目がなんだか泣き虫そうな感じだ。眼鏡すらかけていない。これでは、さながらタヌキだ。

キツネ美弥とポスターのタヌキ少女。類似点といえば背格好くら

いなものである。

英介が頭をかきながら、

「だってさ、校内に張り出す風紀ポスターだぜ」

「あ……ああ、そうか。あたしと顔がそっくりだったら、おかしいもんね」

「そういうこと……悪かったな。二時間もぶつ通しで立たせちゃって」

「いいよ。きみこそ大変だったね。お疲れさん、英介」

気軽に目の前の男子生徒の名を呼び捨てにし、美弥はポスターを眺めてにこにここと目じりを緩めた。

まんざらでもなさそうな彼女を見て、英介は満足する。

好きな相手に似せて描くことができなかったけれど、でも、充実した時間を過ごせたと思う。

風紀ポスターのモデルは、口実に過ぎなかった。

英介は、美弥の肖像を描きたかった。

自分の宝物である絵の具を、彼女のために使いたかったのである。

そのときからすでに、英介は、見られていたのだ。

プロローグ（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm（ ）m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ（ ）（ ）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

01 ポスターの落書き

『すき』

「……なんだこりゃ」

ほかに通行者のいない昼休みの廊下で、掲示板に張り出してあったポスターのいたずら書きを見つめながら、英介は憮然とつぶやいた。

そのポスターは彼が先生に頼まれて製作を手がけた、美弥をモデルにして全身全霊を注いだ作品である。

いたずら書きを発見した瞬間、英介の心に黒い感情がぶくりと湧いた。

英介は子供のころから絵を描くのが好きだった。継続は力なり。六歳くらいから十年間ひたすりに鉛筆と絵筆を走らせていた結果、こと美術方面において秋月高校で彼の右にでるものは三学年生徒先生ひっくるめて皆無である。ゆえに、つい先月。その手腕をみこまれて、学年主任の嵐山先生から『掃除強化週間』のポスター製作を頼まれたのだ。

英介は素直に嬉しかった。クラスメイトから「似顔絵描いて」とせがまれるのとは重みが違う、正当に自分の価値を認められたんだ、という気がした。

なのに、この落書きはなんだ。

たしかにこの作品は学校から依頼されたポスターなのだから、お色気や面白みとは無縁だ。タヌキ顔の少女が人差し指立てて怒っているポスターなど、ドラマに出てくる通行人Aみたく、まるっきり目立たないものだ。はつきりいつてここを通るひとに存在を認知されているかどうかも怪しい。もちろん、だからといってそれがいらずらをしていい理由にはならない。

英介は落書きを凝視した。文字にも個性があり、筆跡を見れば書き手が男か女か、几帳面なやつかおおざっぱか、何歳ぐらいなのか

がわかる。ひよつとしたら、犯人割り出しの手がかりになるかもしれない。

そのふたつの丸文字は、鉛筆らしきもので書かれていた。『すき』。

すき。……………好き、か？

英介の腹の虫が暴れだした。丸っこい筆跡からして十中八九、書いたのは女だろう。なにが、すき、だ。ひとの力作をラブレター代わりにしないでほしい。だれからだれへ宛てたメッセージなのかもわからないし薄気味が悪いし、第一、作者に失礼だ。

英介は鞆から消しゴムと引張り出し、傷がつかないように丁寧にポスターをこしこししたあと、ポケットから取り出したメモ帳をちぎってポスターのそばに添えた。

『いたずら書きはやめてください』

シンプル・イズ・ベスト。とりあえずはこれでいいだろう。

怒れる腹の虫をなだめながら、英介は教室へと戻った。

翌日の昼休み。人影のない廊下のポスター前にて、英介はこめかみをひくつかせていた。

『おへんじくれて、ありがとう』

ずっとあなたがすきだったの』

腹の虫が再び、わいのわいのと疼いてきた。

きのう落書きを消したと思ったら、翌日にこれだ。この落書き犯、ひとの誇りを土足で踏んづけることに気づいてない。これではポスターがかわいそうだ。ただでさえ泣き虫そうなタヌキ面の女子生徒のイラストが、ますます泣いているような気がした。つーかなんだ、この『おへんじくれて、ありがとう』ってのは。やつこさん、俺に宛てて書いてたわけか？ あなたって俺のことか？ ……って、んなわけないか。俺が残したメモには『いたずら書きはやめてくだ

さい』としか書いてない。それじゃ、個人を特定するのは無理だ……いや、まてまて。俺宛であろうとなかろうと、これ以上俺の作品に妙なことを書かないでほしい。

だれかいたずらの目撃者がいないかと左右を見渡してみる。

ひとつこひとり、いやしなかった。

この廊下は人通りが少なく、落書きしてる最中にだれかが通りかかって「御用だ！」になる可能性は低い。きっと犯人も、人目のないときを狙って書いたんだろう。

なんてせこくて卑劣な犯人だ。すげえ頭にきた。

英介はシャーペンを握り、ちぎったメモ用紙に書きなぐった。怒りのままに動く指を止める気はなかった。

『いたずら書きはやめてほしい。』

このポスターは真剣に製作したものだから、落書きをされると本当に腹がたちます。

これっきりにしてください。

ポスターの作者より』

ふう、と一息。少しだけ、落ち着いた。

……なんか、無難な文章になってしまった。もつとこう『こんどやったらお前の　を　してやる！』とか『落書き犯人へ　あなたの家を知ってます。火の気に注意してください』みたいな、犯人がビビッて二度といたずらができなくなるくらいに恐ろしいことを書くつもりだったのに。自分は肝っ玉が小さいんだろうか。

しみったれたメモ書きを残しつつ、英介は昼飯をたிரけるべく食堂へ向かった。

さらに翌日の昼休み。

我慢の限界というのは案外、簡単におとずれるものだということを、英介は体感した。

『ごめんね、怒らないで

あなたとお話がしたかっただけなの

えへへ、願いがかなっちゃった

怒った顔もかつこいいね』

「アホかつ」

ポスターの貼られた掲示板をしたたかに殴った英介は、苛立ちを声にのせて吐き出した。

この犯人、やめる気はさらさらないらしい。文通ごっこがしたいのなら、そばにメモ帳を残せばいいというのに、どうしてわざわざポスターに書くのだ。

勘弁ならない。いやがらせをやめないんなら、こっちにも考えがある。

放課後、美弥に会おう。

五時間目のチャイムが、英介とポスターしかない廊下に響いた。

「ほつといたら？」

同日、放課後。オレンジ色の廊下を、美弥が英介の隣に付き添いながら意見した。

「犯人はね、だれかにかまってほしいだけなの。相手にしてもらって喜んでるのよ。ほら、知らない？ ネットの掲示板とかにひとをおちよくるようなことを書きこむやつ。そういう手合いは無視するにかぎるわけよ」

凜とした姿勢で歩を進めつつ、訳知り顔で犯人像を特定していく。剣道部所属、かつ風紀委員の彼女はポスター製作の責任者のひとりだ。

英介は絵の作者であるとはいえ、現在、あいにくポスターの取り扱いに関しての発言権はない。掃除強化習慣中において、ポスターの所有権は風紀委員にあるからだ。いたずらにポスターを返してく

れと訴えても、ききいれてはもらえないだろう。そこで、先生たちのお気に入りである優等生の美弥に後ろ盾を頼もうというわけだ。まったくもって虎の威を借るキツネだが、このさい手段は選んでいられない。

「あのさ。本当にポスターを回収するつもり？ もったいなくない？ きみ、一生懸命書いてたじゃない、あの絵」

ふと歩みを止めた彼女が、眼鏡ごしに英介の瞳をまじまじと見つめてきた。

英介は肩で息をつき、

「ああ、心血を注いで描いた。だから回収するんだよ。大事な作品を他人の落書きなんかで汚されたくない。あれはこの世にひとつしかない、俺の魂だからな」

「あたしは逆だな。いろんなひとの目にとまらないと、もったいないと思う。たとえばちをつけるひとがいたとしても、それって、注目してくれてるってことの裏返しじゃないの」

「違う。けちをつけられたんじゃない、作品を汚されたの。製作者の俺が許せないっていったんの。だからポスターをひきあげるんだよ」

「まあ、いいけど。ただしその落書きつてのがたいしたことなかったら、できれば考え直してほしいな。あれ、あたしが協力したものでもあるし」

なんやかんやいつているうちに、ポスターが見えてきた。掲示板の前は相変わらず閑散としており、夕闇に彩られた廊下に人影はない。

証拠として残しておいた落書きをしげしげと見つめながら美弥がつぶやく。

「ふうん。しかし、ひまな人間っているもんねえ。ポスターにいたず、落書き犯、この近くにいろわ。きみも探して」

唐突に落書き文から顔をそむけた美弥が、剣呑な瞳を周囲に走らせた。

「お、おい、どうしたよ」

怪訝そうに眉をひそめる英介に、油断なく廊下に目を向けながら美弥は黙って落書き文字を指し示した。

『ごめんね、怒らないで』

あなたとお話がしたかっただけなの

えへへ、願いがかなっちゃった

怒った顔もかつこいいね

そのひと、だれ？』

「……なんだ、こりゃ」

おなじみになったセリフを吐きながら、英介は呆然とした。

『そのひと、だれ？』なんて一文、さっきまではなかった。どう

やら、英介が美弥を呼びにいつてるあいだに書き加えられたらしい。そのひと、とはだれのことだろう。まさか、美弥のことだろうか。

……しかし？そのひと？とはいやな書き方だ。まるで、どこからこちらを監視でもしているかのような……。……見られてる？どこから？

凍ったナメクジに背中を這いずり回られるような悪寒を覚え、英

介は廊下のすみずみに視線を走らせた。

だれも、いない。

「……本当に、近くに、いるのか？」

「多分ね。どうする、捕まえる？」

「できれば、そうだな」

「わかった。きみ、左をお願い」

美弥にいわれるまでもなく、英介は廊下の左側の部屋を片っ端から調べていった。

美術室。

美術準備室。

図工室。

図工準備室。

等間隔に配置された扉はすべて固く閉ざされている。手をかけて

もびくもしない。

英介はいまさらながらに思いだした。放課後、部活動などが特
ない特別教室は、生徒を立ち入らせないために力ギがかけられて
のだ。つまり、廊下左側の部屋にはいないということか。美弥も右
の教室郡を調べつくしたのか、英介に向かって首を横に振っている
……いや、まだ、廊下の突き当たりに、あとひとつだけ調べてな
い扉があつた。

非常口。

避難訓練のときくらいしか活躍しない、極めて存在感のない扉。
開閉される機会があまりに少ないためか、大量の錆がドアのあちこ
ちについている。

本当に開くのか怪しみながら、英介がノブに手をかける。ヤギの
断末魔みたいな軋んだ音をたててゆっくりとドアが開いた。

涼やかな風にほほを撫でられた。

ここは二階。眺めがいい。畑と立ち並ぶ家々が、秋の夕空のした
でどてつと寝そべっている。微妙な間隔で点在するビルによって作
られた長い影が、下校中の小学生を食らう魔物かなにかのように見
える。

英介が爪先立ちで外の踊り場へ出て、一階と三階へ続く砂利まみ
れの階段を覗いてみるものの、やっぱりだれの姿も確認できない。

「無駄足か。つたく、どこいるってんだ」

「英介えー！ ちょっとこっちー！」

美弥の声。こころなしが、声に焦りがうかがえる。

英介が早足で廊下へ引き返すと、美弥が瞳を細めながらポスター
に書かれた丸文字を指差していた。

「そのひと、だれ？」

英介くんと仲がいいの？」

「ちょ……おいおいちょっと待てよ」

増えてる。また書き足されてる。英介くんと仲がいいの？ なん
て部分、さっきまではなかった。

美弥が英介を振り返って、

「きみが書いたんじゃないよね」

「……おい、いまのいいかたはカチンときたぞ。どこの世界に自分の作品に落書きする作者が」

「きいてみただけよ。念のためいつとくけど、あたしでもないからね」

「そりゃ、そうだろうけどよ。じゃあ、だれが？ 俺ら以外、ここには……」

「待つて待つて、ちよつと整理してみましょ」

鹿爪らしい面持ちで、美弥が状況を冷静に分析していく。

「落書き犯人を捜すために、あたしたちはほんの少しだけ、ポスターから目を離れたよね。ほんの少し。長くて一分くらい。その間にだれかがここにやってきて、ポスターに文を付け足したということになるね」

「だな。……でも、いつのまに、どうやって、書いた？」

そこが不可解な点だった。

目を離れたといっても、英介も美弥もここから動いていないに等しい。ふたりの目をかいくぐって落書きするなんて、不可能だ。

ふと美弥が、訝しげにきいてきた。

「ねえねえ、ところでさ、？ 英介くん？ ってなに？」

「は？ 俺の名前じゃん」

「じゃなくて。なんで落書き犯人、きみを英介くんなんて呼んでるわけ？ ずいぶん親しそうじゃない」

「知らん、っていうか俺が知りたいわ。ったく、気持ち悪いったらよあ」

「まったくねえ。いたずらにしてはしつこいっというか、手がこんでるっというか。ひよつとしたらストーカーかもね。ほら、みてみてこれ。『怒った顔もかつこいい』って。これ書いたひと、きみのこと、よく観察してるみたいね」

「気色悪いこというなよ。それよりこのポスター、片付けようぜ。」

これ以上、ストーカーとの文通の道具に使われるのはたまんねえよ」
「それは同感だけど、先生が許可をくれるとは思えないな。これ一応、体面的には風紀委員みんなで製作したものになってるし、掃除強化習慣もあと一週間ほどで終了でしょ？ ただのいたずらだ、もうすぐ終わるから我慢しろ、って一笑に付される気がする」

「なんでもいい、とにかく職員室、いこうぜ。悪いけど、先生説得のバックアップ、たのむわ」

「ん……ところで、さ」

職員室へ向かおうとした矢先、ふいに美弥が立ち止まり、宣戦布告でもするかのように廊下の奥へ向けてきこえよがしに大声をだした。

「犯人、気になるみたいねえ、あたしたちの仲っ」

「は？」

怪訝な顔をする英介の右腕に、突如、美弥がしがみついていた。彼女のふくよかな胸の双丘が英介の二の腕に、むにゅっと押しつけられる。

英介の時間が止まった。

呼吸が停止し、足は床に張りつき、視線は廊下の壁を凝視したまま微動だにせず、そんななか、心臓だけが冗談抜きで破裂するかと錯覚するほどに高鳴っている。

美弥が餌をねだるネコのごとくさらに体を摺り寄せてきた。熱した餅のような、ふくよかな弾力。長い黒髪の甘い香りが英介の鼻腔をくすぐる。英介の血圧が暴走機関車のごとく上がっていく。のどが詰まり、声が出ない。

……おいおい、なんだ。

こいつ、なんでこんな真似をするんだ。

こんな場所で、こんなけしからん行為を平然とできる彼女の神経を疑うと同時に、二の腕に全神経を集中させている自分の頭を疑った。「英介、ほら、セリフ。あたしに合わせて」と耳元でささやく彼女の言葉など、もちろん英介の脳には届きはしない。

五秒も耐えきれなかった。

理性が決壊する一歩手前で、英介は美弥の腕を振りほどいた。

「バ、バカッ。離れる、ほら、職員室、いくぞ」

「ちょ、ちゃんと答えなさいってのっ……ああもう」

むきになって抗議する美弥を従えて、英介が職員室のドアを開けた。

さて、交渉の結果。美弥のアドバイスどおり、先生からポスター取り外しの許可はおりなかった。

そのかわり先生の手により、『落書き禁止』という、有効期限切れの福引券並に役にたたない注意書きが、ポスターの隣に張られた。

「ん？ あのポスターのこと？ きみ、まだ根に持ってるの？」

ジーパンにタンクトップ姿の美弥が、ベッドに寝そべりつつ目を通していた月間雑誌『いまどきの日本刀』から顔をあげて、隣に座る英介へと呆れたような声をだした。

時刻は夜八時。英介の自室。

そう、ここは英介の部屋……なのだが、まるで美弥、ここが自分の部屋であるかのように羽を伸ばしている。英介もそれをいまさらあだこうだと口を出すことはない。

「そりゃ、がんばって描いた絵にいたずらされたのは腹がたつだろうけど、鉛筆の落書きじゃない。ボールペンを使われたとか、破かれたとか、そういう取り返しのないことをされたわけじゃないでしょ」

「たとえばだな」

いまだ制服から着替えていない英介が飲みさしたコーラ缶を机のうえに置いて、

「自分の宝物を赤の他人に壊されたら、どう感じる？」

「そりゃ……うーん、そうとう怒るかな。相手がだれだろうと、た

「だじゃおかないと思う」

「だろ？ 俺にとっちゃ、それとおんなじなわけよ」

「ふうん。なるほど、オツケ。きみの気持ちはわかった」

「反動を利用しつつひょいっと起き上がった美弥が、朗らかな面持ちで提案する。」

「じゃ、今度またいたずらがあつたら、先生たちに内緒でポスター回収しちゃおうか」

「？」

「本来なら許されないけどさ、そこまでいやだつたら、掃除強化習慣の終了前にポスターをはがしちゃってもいいんじゃないの？ あたしはかまわないと思うな。作品にこれまで以上の傷がつけられる可能性があるのは事実だし、あれ、きみの作品だしね」

「つて、はがしたあとポスターはどうするよ」

「この部屋に飾っておいたら？ 持ち出しがばれる心配はないですよっし」

美弥にしては珍しく乱暴なアイデアの端々に、英介は彼女の気遣いを感じた。美弥は、英介の気持ちを尊重してくれているのだろう。たしかに、彼女の言い分にも一考の余地があるかもしれない。美弥の隣にごろりと寝そべった英介は、ぼんやりと天井を眺めた。

ふと、美弥が不満げな声を漏らした。

「しっかし、なんであるとき、あたしのことを彼女だって大声でいってくれなかったのよ？」

「……は？ なんの話だよ？」

「ストーリー、近くにいたのは間違いないでしょ。だったら、ここにいるのは俺の彼女だーっ、て大きな声で宣言すれば、『んま。英介くんってば彼女がいたのね』って感じでストーリーカーも諦めてくれたかもしれないのに」

「あ……そういうつもりであのとき、抱きついてきたのか」

「そ。見せつけてやったわけ。あたしたちのラブラブっぷりを」

「なんだよ、ラブラブっぷりって」

「細かいことは気にしないの」

「細かいことかね……でもさ、危なくねえの？ 俺、ストーカー系のドラマなら昔いくつも見ただけだし、それだと大抵、主人公と仲がよかったり、そばにいるやつから危険にさらされていくんだよね」

「ふ」

眼鏡の奥の切れ長の瞳が不敵に笑った。むくりとベッドから体を起こすや、「ストーカーなんてこうよ。ジャブ、ジャブジャブ」と口にしながら左手をすばやく前後させる。ひよっとしてシャドーボクシングのつもりだろうか。その様子が妙におかしくて、英介は苦笑を漏らした。この子供じみた行動は、きっと彼女なりの励ましのだろう。ポスターいたずらに気を揉む英介への元気づけパフォーマンス。

英介はベッドに背をあずけ、大きくあくびをした。

たしかに、心配しすぎかもしれない。現実にはドラマじゃない。常識はずれな非常事態など、そうめったに起こるわけないのだ。

01 ポスターの落書き（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm（ ）m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ（ ）（ ）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

02 エスカレート

「ごめんなさい。英介くんにきらわれたくない。
あなたが字を書いてほしくないのなら、わたしは書きません。
どうか私と文通をつづけてください。」

私ただ、あなたが好きなだけなの。

私が悪いんだよね。

英介くん、文字を書かないでっていったのに、私、書いちゃったから。きつと、きらってるよね。

ごめんなさい。どうか、きらいにならないで。

これからは、となりのかべに書きます。

私をすてないで。

ああああああ。

どうすれば英介くんが怒らないように許してくれるように書けるのかわからないよ。

私、どうしたらいいの。

どうしたらいいんだろう。

英介くん。好き。

許してくれますか？

きらわないで。

ひとりにしないで。

好きです」

「……………」

朝一番にポスターの様子を見にきた英介は、その場で石の像になった。口だけは「おいおいおい」と動いてくれたが、声はかすれて出なかった。

またしても落書き。

ポスターそのものに落書きされているわけじゃない。書かれているのは、隣の白壁だ。そこに、だ

っと、いったい

何十分かけて書いたのか想像がつかないほどの長い文字が。

この犯人、いったいいつ、これを書いたのだろうか。

わざわざ朝一番に登校して、書いたのだろうか。

それとも、放課後にひとりで残って？

あるいは、その両方？

夕焼けに染まる廊下の光景が、英介の脳裏をよぎった。

みんなから忘れられた、だれにも見向きもされないポスターの前に、女子生徒がひとりぼつんと立っている。

首の骨が折れてるんじゃないかって角度でうつむいてるから、顔がよく見えない。

右手には手垢にまみれ歯形のついた鉛筆。左手には真っ白い消しゴム。

やおら彼女は壁に手を突いて鉛筆を走らせ始めた。

ここはまるでひとの通らない寂れた廊下だから、目撃される恐れはない。

ただひたすらに想い人への愛を文字にする。「好きです」「きらわないで」「すてないで」

女子生徒が首をひねる。喉からぼきんと鈍い音がする。

彼女はなにを考えているのだろうか。ひよつとしたら、私の彼への想いはこんなもんじゃない、とか思っているのかもしれない。

消しゴムを使い、これまでの告白文を真っ白にしていく彼女。そして。

「好きです」「きらわないで」「すてないで」

まったくおなじ文章を女子生徒は書いては消し、消しては書いて、何十回何百回とおなじ作業を繰り返す。

彼女はこう思っている。ああ、これを見たら彼、なんて感じるだろう。私のこと、もっと好きになってくれるかしら。きらいにならないでいてくれるよね。だって、こんなに好きなんだもの。

いまにも天に昇りそうな恍惚の笑みを口元に浮かべながら、いつのまにか夕焼けは沈みきってあたりは真っ暗に、

電気もつけずに女子生徒は丸まった鉛筆で白い壁に幾度も幾度も、
思いの丈を書き綴った彼女はゆらりと移動する。ポスターのある
位置から死角となる壁際へ。

そのまま彼女は待ち続けるのだ。いとしの彼がこないか、と。
やがて朝がくる。

そして彼がきた。壁の恋文をみて、驚いている。
暖かな瞳で見守る彼女。

いまでも、彼の背後から、じつと。

「またいたずら書き？　って、うわ、サイコねえ」
のどまで出かかった悲鳴を辛うじて飲みこみ、英介は背後を振り
向いた。いつのまにやら、美弥が英介の背後に陣取っていた。

「……つくりした！。な、なんで、ここにいるんだよ？」

「きみがこつちにくるのが見えたから。にしても、これ」
深刻げな面持ちで、美弥がつぶやく。

「今回はポスター自体に変なことは書かれてないけど、ちょっとま
ずいなあ。エスカレートしてきてる」

「あ、あんだって？」

「きみの話では、初めのうちはちよろちよろとした文章だったん
でしょ？　？すき？とか？かつこいいね？みたいな。でも、ごらん
なさいな、これ」

壁のおびただしい落書きをあごでしゃくる美弥。

「慣れも生じてきたんでしょね。内容も大胆になって、文量も増
えてきてる。ポスターは無傷だけど、もうポスターがどうか、そ
ういう次元の問題じゃなくなってきてるっばいわ」

筆箱から取り出した消しゴムで壁をこしこししていたずら書きを
消した彼女は、

「うん、やっぱはがしちゃお」

というなり、ポスターの四隅のマグネットをはずし、傷がつか
ないように丁寧にくるくる巻いて英介に差し出した。

「んじゃ、英介が保管してね」

「……いきなりだな、おい。っていうか、はがすんなら帰りがけでもいいんじゃない」

「意思伝達手段のポスターをはがしちゃえば、きみといたずら犯人との接点はなくなるわけでしょ？　こういうのは早いうちがいいのズルズルいくよりはね。それとも犯人との交換日記、まだ続けたいわけ？」

「んなわけねえだろ」

「だったらいいじゃん。先生にはあたしからうまくいっとくわ。じゃ、教室に帰るね」

ひらひらと手を振る美弥の背中を呆然と見つめながら、ポスターをもてあそぶ英介。

遠く、おなじみのチャイムが始業を告げた。

古臭い机から顔をあげた英介は椅子に座ったままうーん伸びをしながら、ポスターのタヌキ面の女子生徒とにらめっこした。我知らず、顔がほころぶ。

美弥の言葉どおり、ポスターをはがしたその日から今日までの二日間、いたずらはされなかった。

当然である。原因となったポスターは、こうして持ち主の部屋に飾つてあるのだから。英介の家に泥棒に入りでもない限り、もう手出しできないのだ。

英介は安堵する。こいつが無事でよかった。

これは特別な作品だ。勇気を振り絞って美弥を誘い、すべてを込めて描きあげた入魂の一作。もう日の目をみることはなくなってしまうけれど、それはそれでしょうがない。どこかの無神経に傷をつけられるよりはましだ。

スズムシの声が閉じられたカーテンの隙間からきこえる。新聞紙や画材で汚れきった自室を一瞥しつつ、英介は気を取り直して机に

向かった。机上には、大型の画用紙。

いま手がけているのは、市の展覧会に発表するための風景画だ。風景画というのは写生が多い。美しい風景を現場におもむいてじっくり觀賞し、そのうえで画用紙にむかつて筆を走らせる。細部まで描写するのが風景画の醍醐味といっても過言ではない。ただ英介の場合、モチーフとなっているのが近所の川原だ。あそこなら、下書き程度なら見なくてもかける。実際、今日の学校からの帰路、現場へ寄って目に焼きつけ、ついでにメモ帳にラフ画スケッチまでしてきたのだ。まあ、実物の風景とは若干の違いはあるにしても、これはあくまで下書き。少々の差異ならば許容範囲内だろう。

英介はうでを鳴らし、先の丸まった鉛筆を握りしめ、ほんの一秒で視界から画用紙以外を排除した。

英介の指の動きに合わせて筆が紙面を滑る。絶妙な筆圧でもって、白い紙上に川波を走らせていく。空に雲、地には尾花。過ぎゆく時を想い、そよぐ風を見て、揺らぐ匂いを感じ、川原のすべてを白と黒の世界で表現する。

夢中。

無我の境地とまではいかないが、それに近い状態に英介はあつた。

「英介えーっ。ごはんーっ」

「わあかつたーっ」

階下で叫ぶ姉に生返事をしつつ英介は絵描きを続行した。

英介が手がけているのは秋の光景だ。夕暮れに近い時間帯。太陽が橙色に染まるころをイメージしている。

現場を見なくても描ける。子供のころから通いつめた景色だ。春の陽光も、夏の夜空も、秋の花々も、冬の雪景色もすべて心のなかにある。

画用紙と絵の具と川原に誓う。きれいに描いてやるからな。英介は絵筆を上下左右に何千往復もさせ、描いて、描いて、気の遠くなるような集中力の元に絵を仕上げていく。

そうして、どれくらいの時間が経過しただろう。スズムシの

声もいつしか鳴りを潜め、代わりにどこかで犬が吠え始めた。

肩がこったので伸びをして、ついでに目覚まし時計を確認する。

夜中の十二時だった。

「めしっ！」

家族を起こさぬよう、英介はなるべく音をたてずに階段を駆け下りた。

あとの祭りだった。

夕食はもはや影も形もなく、代わりに一枚のメモが置かれていた。英介は絶望のうめき声をあげた。

『あんまり遅いから作ったソーメンは全部いただいちゃったぜ。食べたきや自分で茹でることだぜ 怪人姉ちゃん仮面』

02 エスカレート（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm（ ）m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ（ ）（ ）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

03 日常優食

そして、二日後。英介と美弥は掲示板の前にいる。

美弥が肩をすくめて、

「あのさ……なんでまたポスターがここに戻ってるわけ？」

「……しかたねえじゃん。嵐山が戻せ戻せってしつこいんだからよ」

「ああ、嵐山先生ね」

そっけなく美弥が応じ、ひたいに手をやった。どうやら美弥も嵐山先生が苦手らしい。

叱るタヌキ少女のポスターは、再び元の掲示板に張り出されてしまった。

レアメタルより頭が硬い嵐山は、英介たちの言い分を頭からきかず「すぐ戻せ、いますぐ戻せ」と命じてきたのだ。彼にとつてはポスターの安否よりも掃除強化習慣のほうが重要らしい。

と、美弥がはいと手をあげて、発言の許可を求めた。

「質問があります」

「なんだよ」

「どうしてバカ正直に家から持ってきたわけ。？すみませんあのポスター捨てちゃいました？っていえば、嵐山先生もそれ以上追求してこなかったんじゃないの？」

「わかってねえな。もう、ぜんぜんわかってねえ」

窓外の青空にため息をついてから、英介はびしりと人差し指を天井につきたて、

「こと自分の作品に関して嘘はつかねえ。たとえ方便でも、捨てたなんて口が裂けてもいわねえ。それが俺の信念だ」

「ふうん、立派ねえ。立派だけど、自分の首しめてるよね」

ごく近くで、分厚い壺が叩き割られるようなばかどかい破壊的な音がした。

のんびりした空気に亀裂が走った。美弥がびくりと体をこわばら

せ、音のした方角へ顔を向けたときには、英介はもうそちらへ走り出していた。

音は廊下の奥からきこえた。向かう先にあるのは、美術室だけだ。まず英介が美術室前に到着し、遅れて美弥がやってくる。周りにはだれもいない。

だれか飛び出してくるんじゃないか、と身構えながら、英介は引き戸に手をかけ、勢いをつけて開いた。

美術室の窓ガラスが殺されていた。

徹底的に、枠にへばりついた細かな破片を残して、窓という窓がことごとくぶち砕かれていた。

英介は、呆然と立ちつくした。ひしゃげたサッシから流れてくるそよ風が肌に突き刺さる。自分の部屋に毛虫が大量発生したような救いようのない違和感。昨日まで普通に使っていた教室がこんなふうになるなんて。いったいだれが。どうしてこんな真似を。

と、室内の様子を流し見た美弥が、犯人お前じゃねえの？ と英介が疑ってしまうほどに落ち着き払いつつ、状況分析を始めた。

「外から割られたんじゃないわね、ここ二階だし、真下の畑に足跡がついてないし。英介。周り、犯人たちがいるかも。よく確認して」

「犯人たち？ たち、ってなんだよ」

「割れる音は一回しかきこえなかった。なのに、全部のガラスが割られてる。つまり、一斉に、同じタイミングで、全部のガラスが割られてるってことよ」

「あ……」

合点がいった。

これだけの窓をいっぺんに割るなんて、単独犯ではまず無理だ。ということ、何人かがここに潜んでいる可能性があるのだ。

英介はまず、美術準備室をのぞいた。だれもいない。

机の下を調べる。いない。

カーテンの後ろ。でかい彫刻の陰。教卓の裏。いない、いない、

いない。

油断なくあたりを探したにもかかわらず、拍子抜けするくらいだれも見つからなかった。

部屋のだ真ん中で、骨だけになった窓から吹きこんでくる涼風に黒髪をさらしながら美弥がいう。

「まさか、外に飛び出したってことはないってことはないでしょうし……第一、なんだってこんな、徹底的な割りかた……あ、ちよつと英介!？」

美弥の声を置き去りにし、英介は走り出していた。

予感がした。

いや。予感というよりは、確信に近い。

廊下をまっすぐ走り抜け、英介は掲示板をにらみつける。もうおなじみになってしまった、ポスター横の壁の落書き。

「なんだってんだ……だれなんだよ」

こう書かれていた。

『やった。英介くん、できたよ』

「えー、というわけで、この？百鬼夜行絵巻？に出てくるお化けたちは、みんな、元は人間に使われていた傘や草履、杖だったんです。それが、長い年月を経て魂が宿り、こうして生きて動くようになったわけですね。これを？つくもがみ？といいます。漢字で書くと、こうですね」

いい感じにぼけーとした午後の授業、日本史。

趣味は盆栽、好物はアジの干物といった感じのおじさん先生が背伸びしながら黒板に『九十九神』と書きこんでるのを、英介は片肘をつきつつ、うとうとと見ている。

結局、美術室窓ガラス全壊事件は犯人不在のため迷宮入りとなり、当分のあいだ、美術室は出入り禁止になった。学校中を騒がせたセ

ンセーショナルな事件も、二日もすればあっさりとみんなから見放されて「犯人？ だれでもいいじゃんそんなの」という雰囲気になつてしまった。実際、いまだに犯人の正体を気にかけているのは先生がたと英介と美弥、それに美術部と新聞部くらいのものだ。

あれ以来、ポスターに落書きはされてない。変な事件も起きてない。

しかし、犯人が見つかったわけでもない。

あの落書きからして、窓を割った犯人はポスター落書きの人物と同一犯という線が濃厚だ。というより、英介にはそうとしか考えられない。

どうすべきか英介には判然としないが、とにかくにも英介のポスターは今日で閲覧期間が終了。持ち帰りの許可がある。さつさと隠してしまえば、もうこれ以上へんなことは起こらないはずだ。根拠はないが、なんとなくそう思う。

やった。英介くん。できたよ。

いまま思いついても気味が悪い。犯人は、なんのつもりであんな、「じゃあさー、せんせー、カラカサオバケとかイッタンモメンなんという妖怪も、その九十九神なわけ？」

と、教室後方からあがった女子生徒の声に、峠先生が悠々と応じる。

「お、いいですねー。そうです。長いあいだ大切にされてきたものに魂が宿り持ち主に幸福を授けるといふ物語がこの時代の妖怪譚でちらほら見受けられます。すてきな話ですね。ちなみにこの話はテストに出ませーん」

なんだそりゃー、という苦情がちらほらときこえたが、教室中に響く筆記音は小さくならない。

英介は、小さくあくびをかみ殺した。

英介の席は窓際である。初秋、陽光うらかな午後。気温は適度に暖かく、お腹もほどよくいっぱい。そして、峠先生ののったりした授業。

正直、かなり眠かった。いまにもまぶたが閉じそうだ。

「というわけで、みなさんも持ち物は大切にしてくださいね。大切に使っていると、ひよっとしたらあなたの所持品も恩返しをしてくれるかもしれませんよ」

「でもさー。恩返ししてくれるの、九九年後じゃん。そのころ俺らもう死んでるって」

「と思うでしょ？　ところが、身近なところに古いものがあることは少なからずあるんですよ。たとえば先生の使ってるこの辞書。これは、私が祖父から譲り受けたものです。発行から九〇年も経過していますので、あと九年でこの辞書は命を授かるわけですね」

ぽかぽか。うとうと。英介はすでに、夢の世界に片足を突っこんでいた。そのくせ、なぜか峠先生の声は頭のなかによく響く。すみません先生、がんばったんだけどだめそうです。俺、寝ます。

「まあ、要するにですね。今日の授業のポイントは、ものを大切に使うてあげようという話でゲボッ」

えらく湿った音とともに、先生が咳きこんだ。

異様な気配に英介が目覚まし、そして、のどを掻きむしるようにしてもがき苦しむ峠先生を見た。

「げこつ、ひごつ、え、えええええつ」

体を折り曲げ、目をひん剥いて、よだれをたらしながら口を開きさせている。まるで死に物狂いでなにかを飲みこもうとするかのよう。英介は、のどに餅が詰まった老人の姿を連想した。まさか、呼吸ができないのか。

クラス中、まず啞然となった。おいおい先生大丈夫かよ、という空気から、

な、なあちよつと、これまずいんじゃないの？　と不安定な雰囲気気へと様変わりしていき、

「おい、せんせ、先生っ！　やべえよ、これやべえって！」「いや、ちよ、な、だれか、どうにかしてよ！」「大丈夫先生、息、息して、ゆっくり吸って！」

あつという間に収拾のつかないパニックへと豹変した。

だれもが椅子から腰を浮かせた。先生に駆け寄る男子生徒もいたし、隣のクラスに助けを求めにいくとする女子生徒もいた。暴れる峠先生の手足を押さえようとする女子もいたし、ただおろおろと意味不明な声をあげるだけの男子もいた。

英介は立ちつくしながら、それらの騒動を呆然と眺めていた。

まるで現実味にない状況だった。先生が苦しんでいるというのに、どういふ行動をとるのが適切なのかを英介は知らない。下手を打って先生の状態を悪化させたら取り返しがつかないのだ。この異常事態のなかで先陣を切って「先生を押さえろ、だれか他の先生を呼びにいってくれ」ときびきび指示を飛ばし、自ら人工呼吸を試みようとする学級長に若干の尊敬の念を覚えることくらいしかできなかった。

やがて、教室を振るわせるほどの大きな呼吸音。同時に「息、したぞっ!」という男子生徒の叫び。

火のついたような喧騒が一瞬静まり、そしてだれかが、全力疾走した象のごとく荒々しく呼吸を続ける峠先生にきいた。

「先生、大丈夫ですか?」

「げほっ、はあ、わかっ、わかりません、息、息が、急に、はあ、止まって、息が、吸えなくなっ、はあ」

とぎれとぎれながらも峠先生が言葉を発したことにより、教室中を取り巻いていた不穏な空気が多少なりとも払拭された。

落ち着きを取り戻した女子生徒がおずおずと口を開く。

「……先生。保健室、いったほうがいいって。なんかの発作かもしれないじゃん」

「そ、そうですね。悪いけど、みなさん自習、しててください」

「先生、僕、肩、貸します」

保険係が名乗りをあげて峠先生を連れて廊下に消えていった。

先生のいなくなった教室はすぐさま騒然となった。クラスメイトたちはそれぞれ仲良しグループで固まり、峠先生の容態について意

見を飛ばしあっている。

英介も自然と数人で固まっている男子生徒たちの輪に加わり、

「あれ、平気かな」

「わかんねえけど、無事だといいな」

「先生、なにか持病あったっけ」

「いや、きいたことねえ。人間ドックではなんの問題もなかったって、職員室で自慢してたけど」

「英介くん」

だれかに呼ばれ、反射的に英介は振り返った。

クラスメイトの横山が英介の背後に棒のごとく突っ立って「英介くん」と呼んでいる。

眉をひそめる英介。横山とは友達未満の関係で、間違っても下の名前で呼ばれるような仲にはない。なぜ、英介くんなどと呼ぶのか。男子の輪も、不思議げにふたりの動向をうかがっている。

「おう、どうした横山」

「英介くん」

横山はさっきと同じ言葉を、さっきと同じイントネーションで口にした。

「……なんだよ、なんか用か？」

「英介くん」

横山がまったく同じ言葉を、まったく同じイントネーションで口にした。

怪訝に思う英介。おかしい。横山の様子が、明確に変だ。手足を動かさず、関節も曲げず、身体測定中のマネキンのように微動だにせず口だけを動かしている。異様なのはなにより、その瞳。眠っている人間のまぶたを指で無理に開いたような、なにも見ていない眼。

「英介くん」

英介がはつとして振り向いた。

教室のすみから女子の声がした。田口。ろくに話したこともないのに、英介くんと呼んだ。横山と同じ人形の眼差し。

「英介くん」

今度は男子の輪のなかから声がした。藤堂。仲はいいが、彼は普段英介を苗字で呼ぶ。男子の輪がざわめき乱れ、様子のおかしい藤堂から一斉に距離をとった。藤堂はなおも柱のように佇立している。あさつての方角を見つめながらぶつぶつと呟くその様は、やはりマネキンとは思えない。

「英介くん」「英介くん」

宮下が。北里が。あちらから声が。こちらから声が。

「英介くん」「英介くん」「英介くん」「英介くん」

いつしか、クラスの半数が、マネキンになっていた。

彼らは針でとめられた蝶のごとく微動だにせずに英介の名を呟き、残りの半数はさつきを上回る異常事態にただ口をつぐみ、目を泳がせている。

お経のような抑揚のない声が教室を埋めつくしていく。

「英介くん」「英介くん」「英介くん」「英介くん」「英介くん」

「えいすけくん」「ええいいすけえくん」「えええいいすけえくん」「えええいいすけえくん」

電池切れしたテープレコーダーのように間延びしていく声を最後に、やがて、お経がぷつりと途絶えた。

と、操り糸が切れたかのように、マネキンたちが一斉に息を吹き返した。凍りついていた手足を動かし、大半のものが「あれ？」という表情で周囲を見渡した。なかには「でさー」となにごともないかのように友人に語りかける女子もいた。

霜が降りたような沈黙のなか、眠りから覚めた面持ちの藤堂に英介が震える声で問うた。

「な……なに。お前ら、なんの真似」

「は……なにが？」

きょとんとする藤堂。英介が声を荒げる。

「いま、お前ら、みんな、俺の名前、呼んだろ」

「は？　なにそれ」

怒鳴りつけそうな英介をさえぎって、別の男子が代弁した。

「いや、いつてたる。英介くん、英介くんって。なんだったんだよ、いまの」

「なー、怖かったよな。なんのいたずらだよ。趣味悪いよ」

「え？」

「ちよつと待て。なんだそりゃ。……へ？ 俺も？ 俺もいつてたつて？ はあつ？ やめろよ、いつてねえよ」

「なにそれ。わけわかんない」

「いつてた……よな」

喧々諤々の水掛け論が始まった。正気だった半数は「絶対にいつてた。お前らふざけんな」と相手をののしり、マネキンだった半数は一樣に「記憶にない。そっちこそ嘘をつくな」と反論した。そして訪れる、気持ちの悪い静寂。

ドアが開き嵐山先生が「授業中だぞ、静かにしろっ！」と怒鳴りこんで強引に事態を収めなければ、教室は再び混乱状態に陥っていたかもしれない。

クラス全員がしぶしぶ席につき、嵐山先生が教卓にたった。毒煙が教室中に燻っているような、居心地の悪い空気。

嵐山のくどい説教が轟々と吹き荒れるなかで、英介はうつむきがちに椅子に座り、栗肌をたてながら拳を震わせていた。

英介くん。また、英介くん、だ。

だれの仕業だ。なんでだ。なんで、俺なんだ。

もうたくさんだった。気持ち悪い。はやく家に帰りたい。時間はなかなか進んでくれなかった。

午後の授業終了のチャイムが鳴った。

混乱渦巻く頭を抱えながら、ため息をつく英介。明日は、日曜日だ。事件の発端になったポスターも持ち帰れるし、明日くらいはきつと穏やかに過ごせるだろう。たぶん。

ポスターは俺の部屋の壁に掛けておこう。もう二度と妙なことが起こらないように願って。

英介はかばんに荷物をまとめ、席を立った。

03 日常侵食（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm（ ）m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ（ ）（ ）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

04 彼が生んだ犯人

スズメの鳴き声がきこえる。

カーテンの隙間からこぼれた白い光が、英介の部屋をぼんやりと照らしている。

ベッドのなかで目をこすりながら、制服姿の英介は大きく伸びをしつつ寝癖のついた頭をかき、ため息をついた。

昨日のことをぼんやりと思い出す。峠先生が保健室に運ばれ、嵐山先生のお説教が炸裂した後、英介はまっすぐに家に帰った記憶がある。そして自室に到着するや、すぐさまポスターを木製の額にいられて自室の壁にかけ、そのまま服も着替えずに眠りこんでしまった。やはり一連の騒ぎのせいで精神的に疲れていたのだろうか。

あくび。今日は休日だ。英介の両親は早朝から旅行に出かけていて、家を自由に使える。

午前午後ともに英介は完全にフリーである。どうしよう。なにをして過ごそう。今日くらい、いやなことはきれいに忘れて、一日を楽しむべきだろう。まずは朝食を食べないと。

『英介くん』

枕に頭をあずけて呆けていた英介は、ふとだれかに呼ばれた気がして、ぼーっと部屋に目を泳がせた。

床に一面に敷かれた絵具まみれの新聞紙。机の上には整然と並べられた絵筆やらパレットやら。壁には英介の描いた様々な絵が展覧会のごとく陳列されている。壁際には愛用のイーゼルが立てかけられている。六畳ほどの部屋。英介の城。

鍵のかかった窓のカーテンを開き、ついでに目覚まし時計を確認する。九時一五分をすこし回ったところだった。

『英介くん。こっち。こっち。こっち。』

たしかに、聞き覚えのない女の子の声が、室内からはつきりとき

こえたのだ。

たぶん、向こうの壁のほうからきこえた、ような気が……といっても壁には額に囲われたタヌキ顔の少女のポスターがかかっているだけで、絵の少女がこちらに手を振っていて……

英介は石化した。

ポスターの少女が、英介に、手を振っている。左右にぱたぱたと。初めて、おしゃべり、できるね。うれしい』

ポスターの絵が、絵の少女の口元がゆっくりと弧を描き、鈴の鳴るような声を発した。

「……………。あー…………。ちょっと待て。ちょっと待てよ」

英介はひたいに手を当てて顔を伏せ、そのまま十秒経過。

ゆっくりと、顔をあげる。

ポスターの少女が、はにかむような微笑を浮かべている。昨日まではしかめっ面していたはずなのに……というか、ポーズそのものが変わっている。腰に手を当てて人差し指をびしりと天に指して、いない。祈りをささげる聖女のように胸の前で両手の指を組んでいる。

少女が、英介の瞳を見つめて、はつきりと口を開閉させて、うれしそうにいった。

『英介くん。私を産んでくれて、ありがとう』

ぎゅーっと目を閉じる英介。

ゆっくりと開く。

ポスターの少女が、どうしたの、というふうに小首をかしげた。

英介がくわっと目を見開き「は!？」と叫んだ。

なんだこれは。

だれか絵をすり替えたのか。いや、というかなんで絵が動いているんだ。……っていうか、これ、現実か？

『ずっと、英介くんのこと、見てたんだよ。私を描いてくれてたときから、ずっと。一生懸命に私を描いてくれてる姿が、すごく、かつこよかった……………英介くん?』

？これは夢だ？という名の避難所に思考が緊急着陸しそうな風情の英介を見て、少女がくすりと微笑み、

『知ってる？　ものには、魂が宿るんだよ』

押し黙った英介の脳に、ふいに？九十九神？という単語が浮上した。

峠先生の日本史の授業でやったような記憶がある。長いあいだ大切にされてきたものに魂が宿る、という現象。

百年前の絵の具を使い、美弥を想って描きあげた、この世にふたつとないポスター。

……しかし。

そんな、バカな。

『私が最初に見たのは、英介くんが私を描いてくれている姿だったの。始めは頭がぼーっとしててね、なんにも考えられなかった。でも、英介くんが私に一筆いれてくれるたびに、だんだん意識がはつきりしていったの。すごく真剣に、一筆一筆、命を削るみたいにして、大切に描いてくれてたよね。ずっと見てたよ。私を描きあげたときの笑顔、よく覚えてる』

長いあいだ大切にされてきたものに魂が宿る。

ありえない。でも現に、ポスターの少女は、こうして口をきいている。

『英介くんとお話したかった。しゃべれるようになるの、とっても苦労したんだよ。いろいろ練習したの。でも、どうしてもしゃべれなかった。始めはね、ほんのちよつと文字を書くことしかできなかったんだよ。がんばって文字を覚えて、最初に？すき？って自分の体に書いたの。そしたら英介くん、お返事をくれて、すごくうれしかった』

こいつがいままで落書きをしていたのか、それじゃ犯人が見つからないわけだよ　などと霞のかかった頭で考えながら、英介は改めてポスターの少女を凝視した。

少女の造形は変わっていない。彼女の面立ちも制服の色形も英介

が描いたそのままだ。だが英介はアニメや映画を描いたわけじゃない。少女の表情は実際に生きており、しゃべっており、体を動かすたびに自然な肩にかかった茶髪がさらさらと揺れている。まるでアニメかCGでも観ているかのよう。

目覚まし時計が無表情に九時二〇分を刻んでいる。なぜかこの期に及んでようやく、ああこれは現実なんだな、という実感が英介に宿った。

『でね』

少女は独白を続ける。

『文字を書くのに苦労してるうち、別の力が私に宿ったの。えっとね、物体を触らないで動かす力。これも最初はなかなかうまく使えなかったんだ。重いものはびくともしなかったから、ホコリを動かすことから練習を始めたの。それから木葉を落としたり、パレットの水をかき回したり。で、石膏像を動かせるようになったとき、自分の力がどれくらいになったか、チャレンジしてみたくなったんだ。だから、だれもいなかったし、場所も私から近かったから、絵がたくさんある部屋のガラスを、いっぺんに割ってみたの。うまくいったとき、私自身、すごく驚いた。たぶん、私の同種のなかでも、ここまでできるの、あんまりいないと思う』

得意げに語る少女を啞然と眺める英介。

見つからなかった落書き犯人。一斉に割れた美術室のガラス。彼の脳内で、これまで発生していた諸々の事件がひとつの線でつながっていく。

『でね。ここまでやって、これはひょっとしたら、人間も動かせるのかな、なんて思って、あなたのそばにいたひとで試してみたの。最初は？英介くん？ってしゃべらせるつもりだったんだけど、うまくいかなくて、変にのどが絞まっちゃって、倒れちゃった』

「！……それ、その人間って、まさか」

『うん。英介くんの教室にいた、おじちゃんの先生』

峠先生を呼吸困難の追いこんだのがこいつ。

わけがわからない。だれか説明してほしい。

ポスターの少女が説明する。

『そうやってね、いろいろ回り道して、それでやっと、こうして声がでるようになったんだ。声をだすの、本当に難しかった。お話ができるようになって、うれしいよ』

美術室の窓ガラスをぶち割った、峠先生を死なせた犯人を前にして、英介は微動だにできなかった。

……こいつ、なんなんだ。

少女の真意がわからない。害意はなさそうだが、いつ機嫌を損ねるかわからない。窓ガラスをぶち破るほどの力。こいつはなにがしたいんだ。自分の一挙一動がそのまま死に結びついているような気がする。俺はどうすればいいんだ。

とりあえず、掠れた声で「よろしく」とだけ、いえた。

『うん。よろしく』

少女がはにかんだ。咲きたての花のような笑顔だった。

と。部屋の外で、リズムカルに階段を上がってくる気配がした。

陽気で調子はずれな口笛まできこえてくる。

英介がはっと顔をあげ、少女が眉をひそめた。

そして、やや強めのノックの音。

04 彼が生んだ犯人（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm（ ）m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ（ ）（ ）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

05 闖入者たち

「クツクツク。エイスケクン、アソビニキタヨ。ナカニイレテヨ」
ロボットを模したおどけた口調で、美弥がドア越しに英介へ声をかけた。

彼女は英介の自室の前で仁王立ちしている。右手に小型のハンデ
イ掃除機を、左手にゴミ袋を装備して。汚れてもかまわないよう、
上下ともに色気もそっけもない青いジャージを着用している。

今日は彼のプライベートルームを強襲するつもりだ。今日こそは
いくら英介が拒もうが、なにがなんでも部屋をきれいにしてやらね
ばならない。英介は放っておくと、絵の具の塊や紙の切れ端やらで
部屋を埋めてしまうくらいにだらしないのだ。いつだったか、英
介がパンの食べかすを床に放置していたため、油ギツシユな茶色い
悪魔が彼の部屋に幾匹も発生してしまった。あのときは二週間
ほど、美弥は英介の部屋に近寄らなかった。そう、あの悪夢を再来
させてはならない。絶対に。

「エイスケクン。ハイルヨー」

ノックから七秒。これだけ待てば見られたくないものも隠せただ
ろう。それくらいのにっこりした美弥は、ふと眉をひそめた。

ゆっくりとノブを回した美弥は、ふと眉をひそめた。

ドアが開かない。

ちよこざいな。

「英介ー、あたしー、美弥ーっ。なんで鍵、かけんのよーっ」

素の口調に戻りそこまでいって、美弥は怪訝に思った。英介の部
屋に、鍵などついていたらだろうか？

ひどく慌てふためいた英介の気配がドア越しに伝わってくる。ド
アががたと揺れだした。ひょっとして、向こうからも開けよう
としているのだろうか。

「い、いいところにきたっ。おい、きいてくれっ、犯人が、落書き

の犯人がわかったつ。俺の描いたポスターが、ほら、例の『掃除強化習慣』のポスターが犯人だったつ」

「……なんですと？」

「俺が入魂しすぎたせいで、こいつ、本当に魂もつちまった！ いや俺も信じらんねーけどさあ！ 壁の落書きも、美術室の窓ガラスが割れたのも、全部、こいつが原因だった………ああくそ、なんで開かないんだこのドア！」

こいつ絶対寝ぼけてる。

しかたない、ちゃんと目が覚めるまで掃除は勘弁してやろうと思
い、

「あーあーわかった。じゃ、またくるから。それまでに目、ちゃんと覚ましといてよ。おじゃましましたあ」

『美弥ちゃん、か』

という女の子の声が、英介の部屋のなかから、きこえた。

美弥が訝しげな顔をして、再び部屋のドアをノックする。

「なに？ だれかいんの？」

「いや、だからっ」

ピンポン、と玄関のチャイムが鳴った。

ふん、と鼻を鳴らしてきびすを返す美弥。

「はーん。別にいいけどさー。あー、お客さんみたいだから、あたしが出てくんねー。戻ってきたら、ドアの建てつけ、直すの手伝うわ」

「おい待った待った、警察に電話をつ」

英介の呼びかけをきれいに無視した美弥は、階段を軽快に駆けおりて玄関にたどり着き、「はいはい」と返事をしつつ施錠されたドアの鍵コックに指をかけて、

ピンポンピンポンピンポンピンポンピン、ピンポンピンポン。
ピン。

鍵を開けようとした美弥の指が固まった。

チャイムの乱打。常識的に許されない押しかただ。

この場合、チャイムを鳴らす人間はふたつのタイプに分けられる、と美弥は考える。相手がよほどの常識知らずであるか、あるいは、いらついているか、だ。どちらにしろ、ろくな対応のとれる客ではないだろう。

美弥は迷う。本来ならインターフォンで応対すべき状況なのだが、あいにく築二〇年のこの家にそんなものはない。

「どちらさまですか」

やむなくドア越しに誰何するも、返事がない。

念のためにドアチェーンをかけて、鍵を開けたとたんに、外側からチェーンが千切れそうな勢いでドアが引っ張られた。凄まじい音をたててチェーンが限界まで伸びる。

驚きのあまり本気で腰を抜かしそうになった美弥の眼前で口を開けた一〇センチほどのドアの隙間から浅黒い手が突っこまれた。自動車のワイパーのように太い腕がばたと振られ、さらに、隙間から腕の主が顔を覗かせた。見たことのない禿頭の中年男性。白目をむき、まぶたを痙攣させて、なにごとかをぶつぶつとつぶやいている。酔っ払いか、異常者か、あるいは麻薬中毒者か。

美弥は死に物狂いでドアノブを握りしめ内側に引っ張った。男性の腕がつかえ棒になり閉まらない。二度、三度と叩きつけるようにドアを引っ張り、埒があかず思い余った美弥は床に置いていたハンディ掃除機を引っつかんで振りかぶり、差しこまれた腕を力任せにぶっ叩いた。痛みには耐えかねたのか、男のおぞましい腕がぬつと引っこめられた。即座に美弥はドアをぶち閉め、鍵をおろし……そして、その場にへたりこんだ。ここを開ける。そう叫ぶかのように、ダンドン、ダンドンダン、と立て続けに玄関の扉が叩かれる。

……なんだ。なんだというんだ。

言葉もなく呆然としていられたのは数秒だけだった。はっとした美弥はすぐに立ちあがり、居間へと駆けだした。ひよっとしたらあのオヤジ、庭のほうに回りこんでくるかもしれない。居間は庭に面しており、縁側の窓に鍵がかかっていなければ容易に屋内へ侵入さ

れてしまう。窓が施錠されているか、確認しなければ。

美弥は大急ぎでリビングに駆けこみ、そして、最悪の光景に自分の目を疑った。

リビング窓の鍵はかかっていたため、何者も室内に入りこんではいない。だが、最悪だった。

居間から見渡せるさして広くない庭にふたりの人間がいた。さっきのオヤジじゃない。いずれも美弥の知らない人物で、かたや工事用のヘルメットをつけた作業着の若者、もう一方はスーツを着た若い女性だ。それが、まるで重力がこちら側にあるかのように、窓にびたっとナメクジのごとくへばりついている。窓に密着した男性のほほがぎゅぎゅと音をたてて下へ滑り落ちていく。女性にいたっては齧りつかんがごとく窓に顔を接触させているため、泡まみれの口内が丸見えだ。彼らは、家のなかに入ろうとしているのか。

身の毛がよだつ、という言葉の意味を、美弥は初めて体感した。やばい。なんだか知らないが、やばいことになってる。

警察に電話を、という英介の叫びが脳裏にのみがえった。

美弥は逃げるようにリビングを抜け、玄関の電話機まで駆け寄った。玄関ドアはいまだに外からがたと揺さぶられている。

――〇番を押した。永遠にも思えるコール音が一回鳴り、がちやりという受話器のとられる気配、

「秋月警察署です」

「家が変わなひとたちに襲われてますっ、すぐに助けにきてくださいっ、住所は中丸 丁目の」

居間の方からガラスの碎けるけたたましい音、

「 番の ですっ、名前は橋川です、早く助けにきてっ」

受話器を切らずに電話機の横におき、美弥はハンディ掃除機を片手に喧騒の居間へと駆けこんだ。

状況はより最悪になっていた。窓ガラスが床に派手に飛び散っている。窓に寄りかかっていた闖入者たちの体重を支えきれず、サッシ戸そのものがはずれてしまったのだ。

ぼつかりと口を開けた真四角の空間から、若者と女性が土足のまま、いままさに侵入しようとしていた。

美弥は努めて総身の震えを抑えつつ、腹に力をこめ、優位を装って彼らへ宣告した。

「出てってください。警察呼びましたよ、早く逃げないと捕まりますよ」

完璧に馬耳東風だった。おぼつかない足取りでスーツの女性が、次いで作業着の若者が居間に足を踏み入れてきた。その背後でまたひとり、瞳の焦点の合わない主婦風のおばさんが庭にのっそりと侵入していた。だらしなく開かれた口からよだれが滴り落ちている。

この世の終わりがきたのかと、美弥は一瞬、本気で錯覚した。いつかに英介と一緒に観たゾンビ映画を思い出す。街中に蔓延したゾンビウイルスが原因で人間が生ける屍になって、未感染の人々を襲いまくるB級ホラー映画。あの状況とそっくりだ。

どうしよう。どうすればいい。落ち着け。警察に電話が繋がったじゃないか。警察が到着するまで安全なところに隠れていればいい。美弥は自分を鼓舞した。

ともかく、この家にいるのは危なさそうだ。どうにか外へ逃げられないか……と、そこまで考えた美弥の顔から血の気が引いた。

屋外への脱出口がないのだ。

玄関はオヤジゾンビが居座っているし、居間はいくらに占拠されつつある。こいつらの隙間をぬって脱出するのは危険すぎる。ひとが通行可能な出口はこの二箇所だけ。ほかに、逃げ道は、ない。それに、二階にはまだ、事情を知らない英介がいる。

慄然とした。

二階に、英介がいるのだ。

そうだ。さつき英介、部屋のドアが開かないとっていただじゃないか。彼には元より逃げ場がなかったのだ。もしこいつらが二階に上がったら、英介になにをするか、わかったもんじゃない。

とすれば、こいつらをここで食い止めるしかないじゃないか。…

：絶対に、こいつらを、二階にあげるわけにはいかない。

美弥は右手に携えるハンディ掃除機の重さを意識した。ゆっくりと息を吸い、不法侵入者たちへ向かって腹の底から声を出す。

「出ていって」

ゾンビの若者が、棒のような右腕をゆらりと美弥へ差し出してきた。

もはや問答無用だった。

生理的嫌悪感をかきたてる彼らの愚鈍な動きの隙をつき、美弥はハンド掃除機を両手で水平に構え、怒声一喝、全体重を乗せて前へ突き出した。若者の胸元に直撃、彼は冗談みたいにあっけなく転倒した。仰向けに寝そべり、裏返ったカメのごとく手足をばたつかせるも、なかなか起きあがれない。

女性がそこまで接近していた。美弥は反射的に掃除機をぶん回した。てつきり避けられるか受けとめられるかと美弥自身も思っていたその咄嗟の一撃はゾンビ女性の腹部へ見事にきまり、ただそれだけで彼女はバランスを崩し、真横に横転した。

こいつらたいしたことない、と美弥は確信した。動作が緩慢だし、それにどうやらこちらの攻撃を避けるだけの理性すらをも失っているらしい。

いける、と思う反面、冷や汗が背中を伝う。庭に新手が、二名も入りこんできている。野球のユニフォームを着た男子中学生がふたり。

美弥は可能なかぎり大声をあげた。助けて、だれか助けて、と。

それは恐怖から出たものではなく、冷静な判断による救助要請だった。とにかくだれかに危機を知らせようと思ったのだ。だれでもいい、近所のひとに、助けを。

美弥は狭い居間の開かれた窓へ向け、ありったけの声で助けを呼び続ける。

英介の家、半径およそ五〇メートルに近づく人間すべてが正気を失うことも知らずに。

05 闖入者たち（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm（ ）m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ（ ）（ ）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

06 真相

「なんでっ、ドアが、開かないんだよ、このっ」

英介の部屋。

びくともしないドアに悪態をついた英介が、階下での狂騒もつゆ知らず、ポスターの少女へと慎重に問うた。

「おい、これ、お前がやってんのか？ 俺をどうするつもりだよ。ここに、閉じこめるつもりか」

『へ？』

少女は純粹な驚きを顔中で示した。そしてすぐに英介の意を飲みこめたらしく『うっん、違う、違うよ、閉じこめるなんて』と心外そうに否定した。

「だったら、ドアを開けてくれよ。俺を、ここから解放してくれねえ？」

恐る恐るといったふうな英介の問いかけに対し、少女がほがらかに答える。

『もちろん。あ、でもその前に、私のお願い、きいてくれたら、うれしいな』

「お願い……？ なんだ、お願いって」

どんな無理難題を押しつけられるかと、英介は身を硬くした。英介くんの脳みそが食べたいとか、美弥ちゃんの命がほしいとか。

しかし、少女の要望は、

『英介くんのそばにいたい』

きくかぎり、いたって素朴でひかえめなものだった。

『私、英介くんのこと、好きなの。だから、一緒にいたい』

「一緒にいたいって……えっと、どういう意味で？」

死ぬまで。絶対に部屋から出してあげない。死体になっても愛してあげる。

英介の物騒な予測とは裏腹に少女は人差し指を唇に当てつつ、の

んきにいう。

『どうって……んー、英介くんが絵を描くのをぼーっと眺めてたり、おはよう？とか？おやすみ？とかいたり、今日学校でこんなことがあったとかおしゃべりしたり、かな』

「……………は？ それ、だけ？ なんかもっと、他に、ねえの？」

『う、うん。なくはないよ』

少女の声色に若干の照れが混じる。

『できればね、デートしたいの。一緒にどこかに遊びにいきたい。海とか、公園とか、映画とか。無理なら、やっぱりお家のなかで、英介くんが絵を描くのを、見ていたいな。それからね……キスも、したいな、なんて』

最後は、消えてなくなりそうなほどに小さな声だった。

裏表のない、下心をうかがわせない少女の真摯な口調に、英介は拍子抜けすらした。なんだかごく普通の、年頃の女の子と会話しているような気さえしてくる。

「……………あー、なんだ……つまり、俺に、お前の彼氏になれつつうのか？」

『んー。ちよつと違うの』

英介の確認に、少女は四角い縁のなかで、ふるふると首を振った。
『私と、兄妹になって』

まったく想定外な少女のお願いに、英介の心が活動を止めた。

この世のほとんどを知らない澄んだ瞳で、少女がいう。

『学校の図書室で、いろんな本を読んで勉強したの。それで、わかったの。恋人って、結局、他人でしょ。いつか別れるの。でもね、兄妹なら、いつまでも一緒にいられるんだよ。恋人より、兄妹のほうが上なの。だから、英介くんと、兄妹になりたいな……………英介くん？ きいてる？』

呆然と少女の持論をきいていた英介が、

「……………はっ」

突如、笑い始めた。ひとしきり乾いた笑い声をあげたあと、蠟人形のような声で、英介がいった。

「なに妙な勘違いしてんだよ、お前」

きよとんとする少女の幼子のような瞳を見つめ、英介が問うた。

「兄妹で、恋愛はできない」

「……………」

「お前、俺のこと、好きなんだろ？」

「うん、好き」

「キスしたいんだろ」

「う、うん」

「だったら、兄妹になろうなんて、バカだよ」

大きく息を吸い、

「兄妹で恋愛はできないだよ。法律で決められてるんだよ。キスもできねえ。好きだって想いを伝えることさせ、許されねえんだよ。他人のほうがまだいいよ。そんなことも知らなかったのか。いろんな本、読んだんじゃないのかよ」

疲れきった声で英介はすべてを吐き出した。

暴言じみた英介の言葉もどこ吹く風、少女はマイペースに次善の案を提示した。

「じゃあ、恋人。私たち、彼氏彼女になりたい」

「……………」
「それも、勘弁してくれねえか？」

「なんで？……………」
「美弥ちゃんがいるから？」

「……………」
「友達じゃ、だめか」

「友達」

少女の瞳が、悲しみに曇った。

「それって、私のこと、嫌いってこと？ 本に書いてあったよ、お友達でいましょうっていうのは、そのひとのこと、好きじゃないってことだって」

「違う。お前、どんな本を読んで勉強したんだ」

とぼけた少女の言い分に英介は苦笑を漏らした。こんな状況で笑

える自分はどうかしていると思う。

失意に沈んだ声で、少女がなおも食いさがってきた。

『お願い。私を、彼女にして。私の、彼氏になって。英介くんときあいたい。恋人は別に、美弥ちゃんじゃなくてもいいでしょ？』

「は。そうだな。そのとおりだよ。でも……。悪い、やっぱ、無理だ」

意気消沈のまま、英介は自暴自棄気味に言葉を続けた。少女が寂しげに顔を伏せた。室内を薄く照らし出す朝日。窓外のスズメの鳴き声は、いつしかきこえなくなっていた。

不意に英介は少女の力を思い出した。峠先生を操ろうとして呼吸困難に陥れた、あの力。なぜだろう。不思議と少女に対する恐怖は薄れていた。

自嘲を孕んだ英介の声が室内に響く。

「どうする？ 力づくで、俺にいうことをきかせるか？ 峠先生みたいに」

『し、しない。やらないよ。……それに多分、無理だと思う。英介くん、私を生んでくれたひとだから、力、効かないんじゃないかな』

「ふん。……なあ。峠先生の事件のあと、クラスの連中に英介くん、英介くんってしゃべらせたの、お前だよな。なんのつもりだったんだ、あれ」

うつむきがちの英介が、続けざまに質問した。

『うん。あれ、失敗なの』

「失敗？」

『ひとを動かす力にまだ、慣れてなくって。だから、訓練したの。あーあーって声を出すところから始めて、それからなにかしゃべらせようと思って、真っ先に思いついたのが英介くんの名前だったの。でね、何人かに英介くんって声を出させてたら、途中で力が尽きちゃって、変な声になっちゃったの。でも、もう失敗しないよ。ちゃんと力を使いこなせるようになったから。あ、そうだ』

それからふと思い出したように、少女が話を切り替えた。

『それとね、もうひとつ、謝らなくっちゃいけないこと、あるんだ。いつだったかな。私が壁いっぱい？ごめんなさい？とか？きらわないで？って書いたときのこと』

「あ……ああ、あの、怪しいことがびしーっと書いてあったやつ、か？」

『あのころ、まだよく言葉を知らなかったの。どんな言葉を書けば英介くんが許してくれるのか、わからなくって。とりあえず、思いつくものを色々書いてみて、それから必要なものだけ選んだら、あとは全部消そうと思ってたの。でも、消す前に、英介くんがきちゃって。すごく変な顔してたから、ああ、これは書きちゃいけないことだったのかなーってわかって。でも、英介くんの目の前で文字を消すのも変だから、そのままにしておくしかなかったの。だから、ごめんね』

悪びれたように頭をさげる少女を前にして、英介はようやく、彼女の本性に思い至った。

これは……こいつは……本当の本当に、ごく普通の女の子なんじゃ、ないか？

サイコじみた落書きとか、峠先生の呼吸困難とか、俺を想う気持ちかたまたま最悪の形で俺に伝わっていただけで……こいつは普通の、世間知らずの小さな女の子じゃないのか？

そこまで考えて、英介は合点がいった。

そうだ。こいつは生まれてから、一ヶ月程度しか経ってない。彼女はまだ、未成熟の子供なんだ。それも幼稚園とか、小学校低学年くらいの。

彼女の？好き？は、たとえば髪を振り乱した白装束の電波女が包丁片手に「愛してるっていつてええ」とかいった類のものではなく、むしろ、幼稚園児が保育士に不細工な手作り指輪を渡しながら「大きくなったら結婚してくらさい」とか、そういう淡い次元の？好き？なんだろう。きつと。

そう思うと、なんだか妙な気分になってきた。

さっきまでの緊迫感は鳴りを潜め、代わりに微妙な照れくささが英介の心に滲み出てきた。

……と同時に、英介には本格的にわからなくなってきた。こいつは俺に害をなさない。とすると、こいつを怖がる具体的理由がどこにあるのだろうか。考えてみれば、自分で作った、自分が生み出した作品を怖がること自体、なんか間違ってるんじゃないか。

「あー……えーとだな。うん」

英介はせきばらいをひとつ。安全への打算や保身などではない、いわば他念のない？親心？から、少女に語りかけた。

「……わかった。友達だったら、いいぜ。恋人はちよつと難しいかもしれないけど。でも、お前のこと、大事にするよ。俺の作品だもん」

少女が顔をあげた。その幼げな面立ちが徐々に嬉しそうな微笑に彩られていく。うつすらと涙すら浮かんでいるようだった。優しい雨にうたれた虹のような表情。

こんな得体の知れない九十九神の少女と友達になる。それでいいんだろうか。

それでいいんだ。英介はいつしか、自然と納得していた。

俺は、こいつの、作者だ。

俺に拒絶されたらこいつには居場所がなくなってしまう。それは可哀想だ。俺だけでも、こいつを受けいれてやらなきゃならない。俺はこいつの作者で、友達で、親なんだから。

肝が据わった。英介は物怖じせず、友人と接するように少女に告げた。

「なあ、とりあえず、ドア、開くようにしてくれないか？ 閉じこめられてるみたいで息苦しくってさ」

英介の提案を少女は至極あっさり了承した。くすりと微笑みながら、

『うん、わかった。でも、もうちよつとだけ待ってて。もう少ししたら』

「あ？ ああ、ま、開けてくれるんらいいけどさ」

そういいながら英介はそっと時計を確認しつつ、ドアに目をやった。美弥が階下へ降りてから、ゆうに一〇分が経過している。ちょっと遅すぎやしないか。客の応対が終わったら戻ってくるっていったのに。

と、そんな彼のそわそわした様子を見て、少女が笑みを浮かべつつ、目を細めた。

獲物をつけ狙う子猫の瞳だった。

もうちょっとだけ待って。もう少ししたら、いやなひとがいなくなるから。

06 真相（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm（ ）m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ（ ）（ ）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2429z/>

【ラノベホラー】彼のポスター

2011年12月20日22時50分発行